

中部「歴史地震」研究懇談会

◆設立目的

歴史災害を研究する地元の人たちが集まり、意見交換をし、成果をまとめて後世に伝えられる場をつくる。

◆活動状況

年2回程度の会合を持ち、会員から調査研究成果を発表する。開催時期：5月下旬～6月上旬と、11月下旬～12月上旬（2回／年度）
会合の配布資料と議事録ならびに論文を年度毎に簡易製本し、活動報告書として会員に配布する。

◆発起人および事務局

名古屋大学・減災連携研究センター
武村雅之(代表)、都築充雄、虎谷健司
同・環境学研究科 西澤泰彦
同・地震火山研究センター 山中佳子
事務局：中部電力寄附研究部門



中部「歴史地震」研究年報(2013-2021)



◆歴史地震研究の意義

過去50年間にわたり歴史地震調査を引っ張ってきた宇佐美龍夫先生(中部「歴史地震」研究懇談会会員)は、自著『日本被害地震総覧』の中で「地震の理学的側面を普及することが最重要なのではなく、蓄積した事実のうちから、災害の軽減に直接あるいは間接に結びつく事柄を、平易に、しかも正確に普及することがわれわれ専門家の担うべき重要な任務と考えられる。」と述べている。歴史地震調査は100年以上も続く地道な作業である。過去の地震の実相・実態を明らかにして平時からの心構えに役立つようにこれからも地道に続けていかなければならない。同時にこのような地道な活動こそが地震防災のベースであることを関係者にはぜひ理解してほしい。

災害後の復興も含めてどのように地震と対峙していくかには指針が必要である。近代社会が過度に依存する科学技術は、将来の予測については甚だ不完全な能力がなく、何より単なる道具としての域を脱し得ないために、指針がなければプラスにもマイナスにも働く代物である。昔も今も、適切な指針をもつために必要なことは、歴史に光をあて、それに学ぶこと以外に方法はない。“のど元過ぎれば・・・”の繰り返しでは防災の実効性は上がらない。このこと自体、歴史地震が物語る災害教訓である。

文責：名古屋大学減災連携研究センター 武村雅之